

北の気象の不思議発見

鋭峰利尻富士が日本海に浮ぶその姿を早春のサロベツ原野から眺めると、その静かなたずまいに時間が止まったような錯覚にとらわれる。その利尻島の方向からの南西の強風が吹くと、稚内地方では風速がゼロから毎秒二十^リほどに一時間くらいの周期で強弱を繰返し、しかも一日近く吹き続けるという不思議な現象があった。

ナゾ解きの結果は意外にも、利尻島の風下に直径十^{キロ}ほどの大きな空気の渦、カルマン渦が発生して、二列に並んだ渦が次々と稚内の頭の上を通過して行つたという答えとなった。

カルマン渦の身近な例では、電線や木の枝々が風でヒューヒュー鳴るのも渦によるもので虎落（もがり）笛もその一つである。この不思議な現象が、海の向こうの利尻富士で造られた見えざる巨大な空気の渦だったとは、大気の底に住む我々にとって盲点であった。

空気の流れに国境は無く日本の梅雨がヒマラヤ山脈なくしては起こらない事を考えれば、ナゾ解きの結果が当然と見えてくる。最終氷河期が終って一万余年、あの美しい利尻富士から無数のカルマン渦ができては流され消えていく時

の悠久さを想像していると、北国の自然の奥の深さにすっかり魅せられてしまった。

冬の厳しい寒さが『ダイヤモンドダスト』浮遊させ、根室の尾岱沼付近では『四角い太陽』の不思議な姿を見せてくれる。そして屈斜路湖の湖面に『御身渡り』というジグザグの水列を造形し、凍てつく早朝の海に『けあらし』の濃い霧を湧き上がらせる。亜寒帯に属する北海道は温帯である本州のそれと一味も二味も違っており、四季折々に鋭く研ぎ澄ました素顔をかい間見せてくれる。

気象の言葉では細氷と呼ばれるダイヤモンドダストは、過冷却の微水滴が低温で凍ったもので、放射冷却で厳しく冷え込んだ内陸の盆地の早朝、柔らかな陽光に百分の数ミサイズの極微な氷プリズムが浮遊してキラキラと輝く。マイナス四十二℃という最低気温の記録を持つている美深や近く朱鞠内周辺が最適で、条件次第では名寄や富良野で見られ、しばしの幽玄の世界に誘われる。

そして尾岱沼ではオオハクチョウが羽根を休め、流水が浮かぶ凍てつく北の海を前景とした日の出の太陽が、四角形からワイニングラスときには六角形へと変幻自在に姿を変える不思議な現象がある。海面近くの冷たい空気が度の強い

眼鏡のような空気レンズとなり、水平線に顔を出しかけた太陽をぐいーと伸ばして四角形に変形する。上空の強い逆転層で光が屈折されて隠され、下半分だけの太陽が朱のワイニングラスとなる。六角形の太陽はマイナス二十数℃という低温の空气中で極微の六角形の氷柱の結晶が無数に浮遊している時に光の屈折で出来るもので、カナダや北極など探検隊から見たとの報告もある極めて不思議な現象である。

冷たい空気によるレンズの効果は、オレンジ色に輝いて沈みゆく太陽が沈み際の一瞬のあいだ緑色に変身するという『緑の太陽』グリーンフラッシュを見せてくれる。冷たい海を西に臨む北国の海沿いの丘の上からが最も条件がよい。一瞬のまばたきのような緑の太陽の不思議な姿を見るのも幸運と忍耐が必要。

寒さとともに北国の風の問題も尽きない。エリモ岬は全国およそ八百ヶ所のアメダス観測所で日本一風の強い所である。四周を海で囲まれ、寿都のダシ風、日高シモ風、羅臼ダシ、日向（ひかた）風など、陸から海へ吹き出すダシの強風が恐れられている。春の日向風は風炎（フエーン）となつてオホツクの海沿いの街、雄武を襲い、何度も大火をもたらしている。

夏の季節はジリとも呼ばれる海霧が道東の海

を覆い、乳白色の世界に霧笛が吠えるように低音で響く。オホーツクの海沿いの地方では日中に海風が侵入してきて、十度も気温が急落し、また戻るといったカルデラ式気温変化という不思議があるといった具合に興味が尽きることががない。

亜寒帯の不思議な気象現象に魅せられ、石狩平野に下力雪をもたらす石狩湾の小低気圧に興味を抱き、何時の間か洞爺丸台風のナゾ解きに挑戦していた。昭和二十九年九月二十六日、青函連絡船洞爺丸を沈めた台風十五号には、韋駄（いだ）天走りの台風がなぜ『ナゾの急減速』をしたか、北の冷たい海でなぜ『ナゾの再発達』をしたのか、そして出航の決断の伏線となった『偽りの晴れ間』の三つのナゾが残されていた。二十五年後のナゾ解きはこうである。

『冷たい北の海に進んだ台風が時折衰えず温帯低気圧に変わることがある。この際に全く違った熱エンジンに変わりながら再発達するので乗せ変えるため速度を落とす。衰えるがごとく速度を落した台風が、温帯低気圧への変身のなかで再び発達し、洞爺丸を始め五隻の連絡船を巻き込んだ。台風の変身という不思議さが故に起きた悲劇であった』という答えとなった。

北緯四十三度、ぐるり西へ向かえばシルクロ

ードから南フランス、そしてアメリカのボストン、シカゴをへてもとに戻るが、亜寒帯の北海道が不思議な気象の多様さで抜きん出ている。百年余りの役割の終えた百葉箱が気象台から消え、代わってフロンガスによるオゾン層の破壊を調べる有害紫外線の観測が始まった。時代は大きく変わりつつあるが、自然がかい間見せてくれる不思議な姿は今なお新鮮さを失っていない。

（北海道新聞 一九九三・四・二）